

# 高等学校英語科における「論理的な表現力」を高める授業開発

## —「話す・書く」(活用) 場면을重視したコミュニケーション—

教職実践基礎領域  
水野 真緒

### I はじめに

#### 1. 今、求められている資質・能力

2015年5月14日に出された教育再生実行会議の「第七次提言」では、これからの時代を生きる人たちに必要とされる資質・能力として「(1)主体的に課題を発見し、解決に導く力、志、リーダーシップ、(2)創造性、チャレンジ精神、忍耐力、自己肯定感、(3)感性、思いやり、コミュニケーション能力<sup>注1</sup>、多様性を受容する力 (下線は水野による。以下同じ。)」以上の三つを挙げている。これらの資質・能力の中で下線部の要素は、これまでは与えられた課題を速く正確に解決することに重点が置かれていたが、これまでの教育では十分に培うことができないものと見ることができる。

現代社会は、インターネットが普及し、特に経済活動における国境はどんどん希薄になってきている。国内で仕事や生活をしていても、グローバル化を一人一人が実感するのである。これに加え、コンピュータの性能が飛躍的に伸びてきており、現在の常識を覆すような変化をもたらされる可能性がある。このように社会が大きく変化していく中、従来どおりの教育では対応しきれないことに対応すべく考える必要がある。

#### 2. 現代の教育に求められているもの

上記の能力・資質を育成するためにまず必要なことは、学習により身に付けた力や態度を実生活の場面で発揮できるかどうかということである。学校のみならず、保護者や地域を含めた社会全体で子どもの力を育むという発想が必要となってくる。

学校教育の場でどのように実現していくか。「第七次提言」(2015年)では「(1) アクティブ・ラーニングの推進、世界に伍する教育体制の確立、(2) ICT 活用による学びの環境の革新と情報活用能力の育成、(3) 新たな価値を生み出す創造性、起業家精神の育成、(4) 特に優れた才能を有する人材の発掘・育成」という四つが示されている。

これらは、初等・中等教育のみではなく、小学校から大学までの学びを通し、求められる資質・能力を教育によって育てていこうというものである。他校種間での連携をより密なものにし、系統性を持ち、社会に出た際に求められる子どもの資質・能力を共に育てていかなければならない。

#### 3. 現代の教師に求められているもの

現在社会で求められる資質・能力を育むための手だ

てを実際の学校現場で実践していくのは教師であり、指導するためには教師自身が「求められている資質・能力(学力)」を確かに身に付けていなければならない。

具体的にはどのような資質・能力が必要なのか。「第七次提言」(2015年)の(1)~(3)に述べられていることを基に私見を述べる。(1)は、志を持って常に学び続け、より良い授業・学級経営・学校運営に向けて課題を見つける。そして発見した課題に対して、他者と協力して対応できるチームワーク、ときにはリーダーシップを発揮し、責任を持って解決に当たる。さらに、プレゼンテーション能力によって他者に説明を納得してもらったり、人の心を動かしたりすることが挙げられる。(2)は、あえて慣れ親しんだ環境から離れ、未知の場に飛び出すチャレンジ精神と失敗を恐れぬ忍耐力、自分の可能性を信じる自己肯定感を身に付ける。発見した課題に対し、創造性を持って解決策を生み出すことが挙げられる。(3)は、コミュニティの中で他者と目標を共有し、協力して課題解決に取り組むために感性や思いやりを持ち、コミュニケーションの機会を大切にして多様性を受容することが挙げられる。

グローバル化が進む社会を英語科の視点から考えると上記に挙げた中の特にコミュニケーション能力、多様性を受容する力がますます不可欠となってくる。実際に「高等学校学習指導要領解説 外国語編・英語編」(2010年)では、外国語科の目標を「外国語を通じて、言語や文化に対する理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、情報や考えなどを的確に理解したり適切に伝えたりする コミュニケーション能力を養う」と設定している。現代の、特に英語科の教師にはこれらの資質・能力を教師自身が身に付けていることが求められていると考えられる。

#### 4. 現代の授業開発に必要な視点

##### —これからの「言語活動の充実」とは—

平成20年(2008年)答申では「思考力・判断力・表現力等」を育む学習活動の基盤となるものは、「数式などを含む広い意味での言語であり、(中略)発表・討論などすべての教科で取り込まれるべきものであり、そのことによって子どもたちの言語に関する能力は高められ、思考力・判断力・表現力等の育成が効果的に図られる」と述べている。また「国語をはじめとする言語は、知的活動(論理や思考)だけではなく、コミュニケーションや感性・情緒の基盤でもある」として

いる。こうした観点から「高等学校学習指導要領解説総則編」(2010年)でも「言語に対する関心や理解を深め、言語に関する能力の育成を図る上で必要な言語環境を整え、生徒の言語活動を充実すること」と述べられている。「確かな学力(習得・活用)」に加え、コミュニケーション能力や(感性や情緒を育て、言語や文化に対する理解を深めて)多様性を受容する力を育むためには、改めて「言語活動の充実」、その具体化が欠かせないものであるということが分かる。

## Ⅱ 高等学校英語科に求められていること

### 1. 現在の英語教育の課題

世界的にグローバル化が進展する中で求められる人材育成に対応すべく外国語(英語)教育改革が行われている。一方で、英語教育に関しての実践的・理論的な諸課題も挙がってきている。教員の英語力やオールイングリッシュ、評価の在り方に関する課題もある中、学習指導要領が変わったことによる生徒の英語力に関する新たな課題も既に指摘されてきている。

平成26年の英語教育の在り方に関する有識者会議では「中・高等学校については、英語教育の目標としてコミュニケーション能力を身に付けることを設定しながら、『何ができるようになったか』よりも、『どれだけ語彙や文法等の知識を身に付けさせたか』を中心とした授業が行われているとの指摘がある。この場合、学習を通じて『知識として何を知ったか』が重視されがちとなり、コミュニケーション能力の育成を意識した取組も不十分である」と指摘している。

また、平成26年度の「英語教育実施状況調査」(調査実施時期:平成26年11月14日から平成27年1月23日)においては「高等学校第3学年に所属している生徒のうち、英検準2級以上を取得している生徒は11.1%で、平成25年度の11.0%から0.1ポイント上昇している。英検準2級以上を取得してはいないが、相当の英語力を有すると思われる生徒は20.8%で、平成25年度の20.0%から0.8ポイント上昇している。両者を合わせると31.9%となり、平成25年度の31.0%から0.9ポイント上昇している」としているが、第二期教育振興基本計画の目標<sup>注2</sup>を達成している生徒は依然として約3人に1人である。

以上、学習指導要領が変わったにも関わらず、いまだに語彙や文法学習中心の授業になっており生徒のコミュニケーション能力の育成につながっていない実情がある。生徒の学習意欲を高めつつ英語力やコミュニケーション能力の向上を図るための言語活動を取り入れていくことが現在の英語教育の課題であるだろう。

### 2. 変化する入試制度と現行学習指導要領

現在大学入試に共通して使われている「大学入試センター試験」に代わり、平成32年からの実施が検討されている「大学入学希望者学力評価テスト(仮称)」

の導入について議論がなされている。「大学入学希望者学力評価テスト(仮称)」では教科別の「教科型」の問題に加え、他教科・他科目と複合された「合教科・科目型」「総合型」の問題が組み合わされて出題される。また「大学入試センター試験」のような多肢選択方式のほか、記述式の問題も導入され、特に英語科では4技能を総合的に評価できる問題の出題(記述式・面接等)や民間の資格や検定試験の活用も検討されている。

一方、第3回高大接続システム改革会議(2015年)では英語科目の今後の在り方について「生徒の英語力について、4技能全般、特に『話すこと』と『書くこと』の能力が課題」、「統合型の言語活動(例:聞いたりを読んだりしたことに基づいて話したり書いたりする活動)が十分ではない」等といった「発信力が弱い」という課題が挙げられている。新たな入試制度や現行の英語科目の実践的な課題を併せて見ると、今後更に「話すこと」と「書くこと」の能力育成が謳われることは必至である。

### 3. グローバル化に即した英語科の授業

「I はじめに」でも述べたとおり、グローバル化が進む社会においては、英語化の視点で見ると特にコミュニケーション能力と多様性を受容する力が求められるだろう。確かな学力に加え、これらの能力を育む言語活動を授業では取り入れていかなければならない。また、現在の英語教育を取り巻く環境を見てみると、コミュニケーション能力に加えて「話すこと」「書くこと」といった発信力も求められている。そこで「話すこと」「書くこと」を中心とした言語活動を授業の基盤にして、コミュニケーションに欠かせない自分の意見を表現する表現力を育みたいと考えた。

## Ⅲ 実習校・生徒の実態—研究実践実習校の場合—

### 1. 生活面

生活面では学校全体を通して真面目な生徒が多く、服装の乱れや問題行動はほとんど見られない。また、挨拶をしっかりとできる規律正しい生徒も多く、礼儀正しく日々の学校生活を送っている。

### 2. 学習面

学習面では生徒は授業をしっかりと受け、課された提出物もきちんと提出している。しかし授業中のワークシートやテストの結果等を見るとできていない生徒に学力差が大きく出てきている。

### 3. 英語科の授業

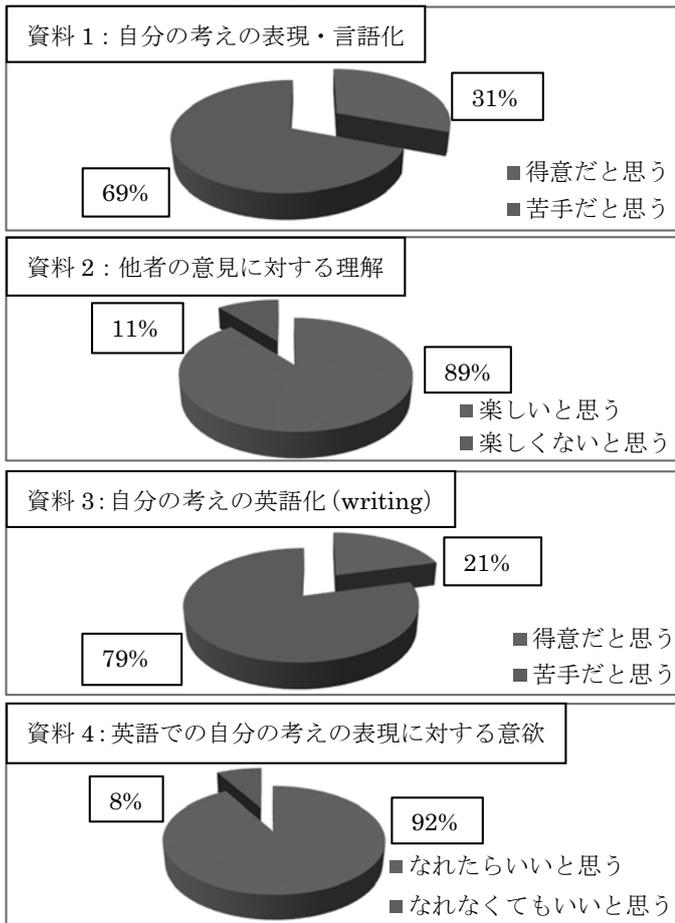
言語活動の際、自分の意見・解釈等を進んで言える生徒は少ない。考えは持ち指名されれば言うが積極的ではない。また自分の考えを目的や場にふさわしく言葉にし、英語化することが苦手な生徒が見受けられる。

## Ⅳ 研究に当たって—テーマ設定の意図—

### 1. 生徒の実態から—高校2年生—

研究に当たり、生徒の学びに関する意識調査のため

のアンケートを事前に行った<sup>注3</sup>。



まず、コミュニケーションに関するアンケート結果については、以下のとおりである。(1)「自分の意見・考えを表現すること (日本語でも英語でも、『自分は○と思う、△△だから…』)などのようにわかりやすく、自分らしく文章を書いたり話したりする) が…得意だと思う／苦手だと思う」という項目に対しては「日本語でなら、自分の意見や考えを表現することができる」「英語だと、文法等が難しく、どの単語を使えばよいか分からなかったり、単語が出てこなかったりするので苦手」「日本語で文章を考えられても、英語に上手く直せない」「自分の意見を言う・伝えるのが好き」「小学校や中学校で自分の意見を言う機会が多かった」「自分の意見を言ったあと、相手が理解しているようなので得意」「相手が理解していないようだったり、聞き返されたりするので苦手」という意見が多かった。

アンケート項目に対して、英語で自分の考えを表現すると考えている生徒もいたため、二択の回答では「苦手だと思う」と答えていた生徒が多かった。しかし、記述の回答を見る限りでは、日本語で自分の意見を表現することは得意と答えている生徒がほとんどであった (資料 1 参照)。

(2)「他の人の意見・考えを聞くことは…楽しいと思う／楽しくないと思う」という項目に対しては「他の人の意見を聞くことで、自分とは違う考え方を知ること

ができ、新しい発見ができるからおもしろい」「どうして自分と違う意見なのか興味がある」「新たな視点からの考えを聞けて楽しい」「視野が広がる」「興味のない話であれば楽しくない」という意見が多かった (資料 2 参照)。

これらのことから、コミュニケーションに関しては「日本語であれば、自分の意見を表現することが得意」「英語であると、相手が理解してくれない」「他者の意見を聞くことで、視野が広がる」「興味がある話題の場合、より相手の意見を聞きたくなる」と生徒が考えていることが分かった。

次に、**writing** に関するアンケート結果については、以下のとおりである。(3)「英語で文章をわかりやすく、自分らしく書くことが…得意だと思う／苦手だと思う」という項目に対しては「文法が難しい」「どの単語を使えばよいか分からない」「単語や熟語をあまり覚えていないので、表現できない」「日本語の文章を上手く英語に直せない」「言いたいことを簡単にして言い換えているので、英語でも相手に分かりやすく伝えられると思う」という意見が多かった (資料 3 参照)。

(4)「英語で自分の意見・考えをわかりやすく、自分らしく表現できるように…なれたらいいと思う／なれなくてもいいと思う」という項目に対しては「将来、役に立ちそう」「外国の人と話せるようになって、コミュニケーションをとりたい」「海外旅行に行くときに役立ちそう」「国際社会では英語が必要になってくるから」「使う機会が増えそうだから」という意見が多かった (資料 4 参照)。

これらのことから、**writing** に関しては「文法や語彙力に課題がある」「言いたいことを英語に直す際に、簡単に言い換えられるかどうかという課題がある」「将来、国際社会に出るに当たって英語を使えるようになりたい」「旅行したり外国人と話したりする際に英語が必要となるから使えるようにしたい」と生徒が考えていることが分かった。

以上より、コミュニケーションに関しては肯定的に捉えている生徒がほとんどであるが、英語でのコミュニケーションとなると、様々な課題を持っているということが分かる。また、英語を学ぶ必要性を感じている生徒がほとんどであった。そこで、他者とのコミュニケーションに対する関心と英語の学習に対する意欲はあるため、英語で自分の意見を表現できるようにさせたいと考え、研究テーマを設定した。

## 2. 表現力の育成のために—意義と提案—

学習指導要領が改訂される以前は、いわゆる「ライティング指導」は和文英訳を中心に行われていた。実際に自分で考えた意見を述べるものではなかった。そこには自分の考え・意見を表現した生徒の **writing** をどのように評価すべきか、という課題もあったからだ

と考えられる。

しかし、学習指導要領が改訂されこれから求められる「表現力（判断力）」に関して、文部科学省は「習得した基礎的・基本的な知識及び技能を活用して課題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力その他の能力」（創造的な学び、たくましく生きる力のステップとして）を育むことを求めている。

そこで私は、いわゆる表現力について課題を解決するために必要な表現力に加え、相手の意見も踏まえたうえで自分の意見と併せて考えつつ（協働的な学び、討論やグループでの話し合い、学び合い）、相手に質問や相手の意見に沿った自分の意見を表現できる力（質疑応答、批評的な学力等）を付け加えたいと考えた。和文英訳ではない、自由英作文としての **writing** を行い、生徒の英語でのこれらの表現力を育みたい。

高校での指導に当たり小学校からの系統性も考える必要がある。小学校の外国語活動では「聞くこと」「話すこと」という音声面を中心としたコミュニケーションに対する積極的な態度の一定の素地の育成が図られている。そして中学校の英語科において「聞くこと」「話すこと」の音声面では小学校段階での外国語活動を踏まえて指導内容の改善が、「読むこと」「書くこと」では指導の充実が図られ、この四つの領域をバランスよく指導することで外国語学習の基礎が培われている。

これらを受け高等学校の英語科では中学校まで培われた学習の基礎の上に、聞いたことや読んだことを踏まえ、コミュニケーションの中で自らの考え等について内容的にまとまりのある発信ができるようにすることを目指し、四つの領域の言語活動の統合を図ることが求められている。

「聞くこと」「読むこと」を通じて習得した知識等について、自らの体験や考え等と結び付けながら活用し、「話すこと」「書くこと」を通じて発信することが可能となるよう「4技能を育成する指導の充実」が求められている中で、自らの体験や考えと結び付けて活用できるような場面設定を考えることは不可欠である。実際、**writing** に関する先行研究<sup>注4</sup>における生徒の自己評価結果で、生徒が **writing** で「扱ってほしいテーマは、生徒の『自分』の視点から、『自己』に関りのある話題を書いていくものが支持された」一方で、「教師側が考えて提供するテーマは不評」という結果が出ている。これを参考に、生徒の生活体験とリンクした **writing** の場面設定を考えていかなければならないと考えた。

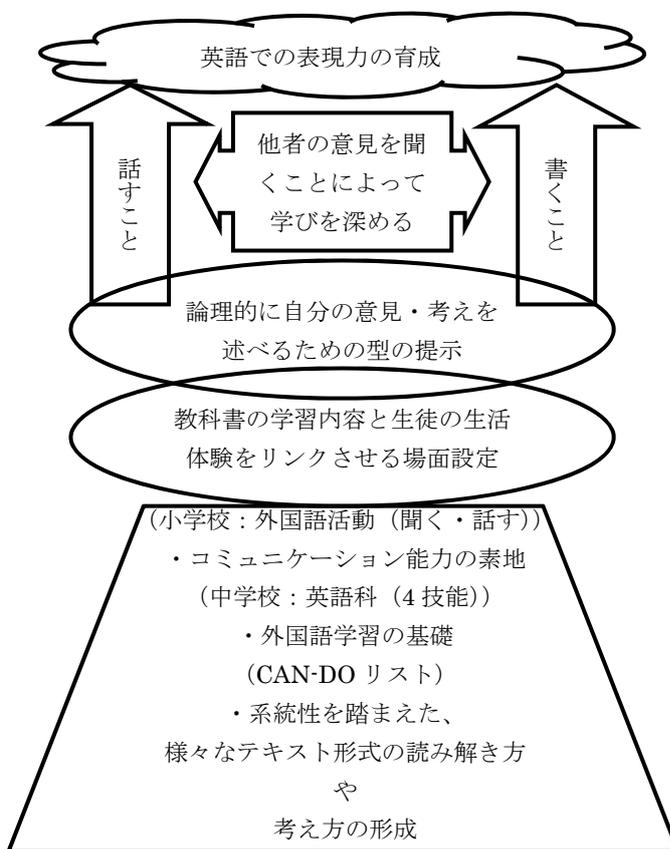
また、高等学校英語科を科目別に見ていくと、開設されている科目に「コミュニケーション英語」と「英語表現」がある。「コミュニケーション英語」では4技能の総合的な育成が図られる一方で、「英語表現」では「話すこと」及び「書くこと」に関する技能を中心

に、論理的に説得力を持って、より効果的に伝える能力を伸ばす指導が求められている。

学習指導要領を踏まえ、「話すこと」「書くこと」を授業の中心に据え、ペアやグループ等で関わり合える言語活動によって授業内の生徒同士のコミュニケーションの機会を増やし「自分の考え」「解釈・判断」等を表現できるものになりたい。そして、型を提示することによって論理的に説得力を持って自分の考え・意見を伝える能力を伸ばしていきたい。

教科書に記載されているとおりの「話すこと」「書くこと」の言語活動を、表面的に授業に組み込むのではなく、生徒の実生活・経験により近い場面を設定し、切実で必要感のある自分のこととして考えやすく、自分の意見・解釈等を持ちやすい言語活動を授業で扱うことによって論理的な表現力を育成していこうと考え、研究テーマを設定した（資料5参照）。

資料5: 高等学校英語教育・研究構想図(水野、2016)



**writing** の評価に関しては、小室（2001）が「日本国内では、特に米国のアカデミック・ライティングと比べると外国語としての英語のライティング研究の立ち遅れが目立っている」中で「研究の中心は、従来から指導法に関する主張が主流であり、ライティングの評価そのものの実証的研究はほとんどされていない」と述べている。

**writing** の評価は、①全体的評価、②分析的評価、③特定要因の評価の三つに分類される。それぞれ一つ

だけでは評価の信頼性に欠けるため、これら三つを組み合わせて評価項目を作成することにした（資料 6 参照）。そして、生徒にも評価観点を示すために、自己評価（self-evaluation）も行うことにした。

writing においてコミュニケーションが成立する場面というのは、書き手と読み手が存在する場合である。ただ課題として writing を書けばよいというのではな

く、読み手に興味を持って読んでもらうということを意識させるために、他己評価（peer-evaluation）<sup>注5</sup>も加えた。

これらの評価項目、自己評価、他己評価がどのように生徒の writing に影響するのかを考察することで、writing の評価の在り方についても提案していきたい。

資料 6 : writing 評価・6 カテゴリーの視点から<sup>注6</sup>

CATEGORY	Idea & Content	Organization	Individuality	Accuracy	Target Grammar	Number of Words
writing 評価	①	①	①	②	③	③

## V 教師力向上実習 I・II

### 1. テーマ

<教師力向上実習 I テーマ>

高等学校英語科の授業における  
「話すこと」「書くこと」の能力・学力育成  
—主体的に楽しく学び、学級全員と話せる  
学習・言語環境設定を基軸に—

<教師力向上実習 II テーマ>

主体的な表現活動を軸にした関わり合いの授業開発  
(高等学校・英語科)  
—「表現力」育成の場面を工夫した  
授業構想を中心に—

### 2. テーマ設定の理由

これから求められる「表現力（判断力）」に関して、文部科学省は「習得した基礎的・基本的な知識及び技能を活用して課題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力その他の能力」（創造的・批評的な学び、答えのない社会をたくましく生きる力のステップとして）を育むことを求めている。

また、高校における英語科教育の位置づけ・特色をレベル化すると、(1)文部科学省が求めるこれからの英語力と日本人としてのアイデンティティの育成、(2)「自立・協働・創造」（第二期教育振興基本計画）を具体化する言語能力・コミュニケーション能力の育成、(3)英語を通して自分の考えを形成（価値ある自己形成と言語力）、そのための伝統文化・歴史等の理解、に分けて考えることができる。

この3点に付け加えて私は「(4)自分をより効果的に、説得力を持って、自分らしく表現できる能力の育成」を加えたいと考えている。これは「聞くこと」「読むこと」を通じて習得した知識・技能等を、自分の体験や考え、発想・思考等と結び付けながら活用し、構成・選択・発信するという、自分の意見や考え、思いを表現する能力である。

生徒が主体的に自分の意見や考え、思いを表現することに取り組むことができるような授業開発を行い、自分の意見や考えを表現することを通して友達や様々

な情報との対話・コミュニケーションを楽しんでもらいたいと考えた。

「表現力」（「聞くこと」「読むこと」を通じて習得した知識・技能等を、自分の体験や考え、発想・思考等と結び付けながら活用し、構成・選択・発信するという、自分の意見や考え、思いを表現する能力…聞く・読む技能の習得の次のステップとして「書く」「話す」（伝える、深める）…等の活用した技能）の育成に関しては、評価基準（ルーブリック）・方法や振り返りの方法を工夫していく必要がある。

課題を主体的に解決するために必要な「表現力」に加え、相手の意見も踏まえたうえで自分の意見と併せて考えつつ（協働的な学び、討論やグループでの話し合い、学び合い）、相手に質問や相手の意見に沿った自分の意見を表現できる力（質疑応答、批評的な学力等）も育みたいと考える。

### 3. 実践計画

<教師力向上実習 I> 2015年5月（4週間実習）

段階	主な学習内容
導入	<ul style="list-style-type: none"> <li>グループトークを行い、学習内容に対する興味、関心を持つ。</li> <li>単元の必修文法事項について説明し、教科書にある問題を解く。</li> <li>本文の要点（part や paragraph ごとに）を押さえ、読むためのポイントを理解する。</li> <li>Quick Response Sheet での音読練習や解説を通して単元の新出単語や表現をおさえる。</li> </ul>
習得	<ul style="list-style-type: none"> <li>音読練習や Q&amp;A を通して、本文の流れをつかむ。</li> <li>新出表現がどのように使われているか捉える。</li> <li>本文の構成(discourse marker の使い方)をおさえる。</li> </ul>
活用1	<ul style="list-style-type: none"> <li>本文の内容を自分の体験や考えと結び付けて考える。</li> <li>ペアやグループで互いの意見を交流させ、自分の考えを深める。</li> </ul>
活用2	<ul style="list-style-type: none"> <li>writing の評価基準を生徒に説明する。</li> <li>まずは日本語で writing (essay) の構成を考える（教師による「型」（導入・本論・結論の段落分け、discourse marker の使用等）の提示も行う）。</li> <li>教科書本文や教師の型を参考にしつつ、自分の意見を（自分の生活体験・経験と併せて）読み手に分かりやすく伝えられるように英語で writing を書いていく。</li> <li>ペアやグループで発表し合い、聞き手は発表者に発表</li> </ul>

	を聞いて感じたことを英語でコメントする。	活用3評価・一般化	
評価	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ペアやグループでの発表で、互いに評価し合う。(大まかな構成・語数・内容について評価する。教科書本文の構成や新出表現、文法事項等を使っている場合は加点する。)</li> <li>・(活用2での聞き手からのコメントを参考に)自己評価を行う(他者評価の評価項目に加え、楽しんで学習に取り組めたか等のコミュニケーションに関する振り返りも行う)。</li> </ul>		<ul style="list-style-type: none"> <li>・ペアやグループでの発表で、互いに評価し合う。</li> <li>・自己評価を行う。</li> </ul>

(導入→習得→活用1→習得→(…)→活用1→活用2→評価)

(習得1→習得2→活用1→習得2→(…)→活用1→活用2→活用3)

### <教師力向上実習Ⅱ> 2015年8~9月(4週間実習)

### 4. 実践内容

段階	主な学習内容
習得1 導入・基礎	<ul style="list-style-type: none"> <li>・グループトークを行い、学習内容に対する興味、関心を持つ。また、活用2に向けて、最終的に何を行うか(言語活動)の見通しを持つ。</li> <li>・単元の必修文法事項について説明し、教科書にある問題を解く。</li> <li>・本文の要点(partやparagraphごとに)を押さえ、読むためのポイントを理解する。</li> <li>・Quick Response Sheetでの音読練習や解説を通して単元の新出単語や表現をおさえる。</li> </ul>
習得2 基本	<ul style="list-style-type: none"> <li>・音読練習やQ&amp;Aを通して、本文の流れをつかむ。</li> <li>・新出表現がどのように使われているか捉える。</li> <li>・本文の構成(discourse markerの使い方)をおさえる。</li> </ul>
活用1 発信・交流	<ul style="list-style-type: none"> <li>・本文の内容を自分の体験や考えと結び付けて考える。</li> <li>・ペアやグループで互いの意見を交流させ、自分の考えを深める。</li> </ul>
活用2 発信・交流・発展	<ul style="list-style-type: none"> <li>・writing / speakingの評価基準を生徒に説明する。</li> </ul> <p>&lt;writing&gt;</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・まずは日本語でwritingの構成・タイトルの付け方、資料活用等を考える。</li> <li>・教師による「モデル・型」の提示から、方法と目標、習得から活用へ等を知る。</li> <li>・教科書本文や教師のモデル・型を参考にしつつ、自分の意見を(自分の生活体験・経験と併せて)読み手に分かりやすく伝えられるように英語でwritingを書いていく。</li> <li>・ペアやグループで発表し合い、聞き手は発表者に発表を聞いて感じたことや考え、質問、共感等を英語でコメントする。</li> </ul> <p>&lt;speaking&gt;</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・話すことのキーワードを書き出す。(その際、キーワードとは何かも指導する。)</li> <li>・話し方(プレゼンテーションの仕方)の構成モデルと活用の視点を考える。(教師による「モデル・型」の提示、自分らしく活用するための観点も指導する。)</li> <li>・まず原稿を書き論理的に、自分らしく書いているか検討する、次に英文化を行う。(語彙、表現の型、相手意識、言い方の細部、資料その他を工夫させる。)</li> <li>・ペアやグループで発表し合い、聞き手は発表者に発表を聞いて感じたことや考え、質問、共感等を英語でコメントする。</li> </ul>

事前に行ったアンケートから、ほとんどの生徒が他者の意見を聞くことについて肯定的であった。このことから、コミュニケーションの基盤ともなる聞く姿勢ができていと考えられる。また、speakingに対しては意欲的であった。一方で、自分の語彙力が低いからwritingができないと考えている生徒が多かった。そして、文法が分からないからwritingができないという生徒が目立った。これらのことから、教師力向上実習Ⅰ・Ⅱの授業実践では、writingの言語活動を中心に据えた授業を行うことにした。

#### (1) 教師力向上実習Ⅰ

writingを行うに当たり、「自分の語彙力は低いと思っていたが、自分の言いたいことを言うことができる」「文法ができないと思っていたが、自分の伝えたいことが伝わっている」という経験をしてほしいと思い、活動を設定した。また、「英文にできない」という生徒もいたので、まずは自分の意見を持ちやすいよう、writingのテーマ設定にも気を付けた。そして、英文にできず困っている生徒には机間指導で個別に対応した。加えて、「自分らしく」が分からない、という生徒もいた。そこで、朱書きで「自分らしく」書いている部分を示し「このように書くと、自分らしく書けるのか」と気付かせるよう心掛けた。また、読み手がいることを意識し、自分自身の感情や考えにぴったりの言葉を選ぶということを念頭に置いてwritingを書いてほしいと思い、「Self-Evaluation(自己評価)」の欄を設けた。

第二週では、「Now, you're a player of wheelchair tennis. What do you think about the rules?」というテーマでmini writingを行った。そして第四週には「What do you want to try hard?」というテーマでmini writingを行った。

また、授業構成に関しては「聞くこと」や「読むこと」を通じて得た知識等について、自らの体験や考え等と結び付けながら活用し、「話すこと」や「書くこと」を通じて発信することが可能となるよう、習得から活用の流れや活動の場面設定も工夫した。

まずlisteningでT/F Qsを行い、本文の大まかな流れを把握させた。次にsight-translation sheetを使って音読を行い、日本語での意味を把握しつつ内容読解

をさせた。そして Oral Question を行い、Reading の能力も伸ばしつつ、内容理解を深めさせた。このように習得させた知識を活用できるように writing の活動を設定した。writing の前後に speaking の場面も設け、4 技能を総合的に育成できるようにした。

## (2) 教師力向上実習 II

単元末での writing の場面設定について、単元のトピックに関連した場面の設定であれば、たくさんの場面設定を挙げることができる。しかし、それでは学習内容と生徒自身の生活体験が繋がらず、自分の考えが持ちにくくなってしまう。自分の生活体験と関連していなければ、一般的な意見にしかならないと私は考えている。そこで、生徒の実態を把握し、生徒の生活体験と学習内容を関連させられる場面の設定をした。生徒が自分の考えを持ちやすく、より学習が深まるよう心がけた。

また、今回の単元は学生のプレゼンテーションを本文に扱っているものであった。それに伴い、英語で論理的な文章を考える練習として、ミニプレゼンテーションを行うことにした。教師が型を提示し、それにそって自分の意見を肉付けしていくという形で実施した。

## 5. 実践の考察

### (1) 教師力向上実習 I

#### ①実践の成果

資料 7：考えの形成・論述の具体化—writing における変容—  
(第 2 週 (上) と第 4 週 (下) ・生徒 S)

Your Opinion : 'Now, you're a player of wheelchair tennis. What do you think about the rules?'

\_\_\_\_\_

\_\_\_\_\_

\_\_\_\_\_

\_\_\_\_\_

\_\_\_\_\_

Self-Evaluation

Your Ideas / Content : <b>Interesting?</b>	I think so. / I don't think so.
Your Feelings / Thought : <b>Are There?</b>	I think so. / I don't think so.
Word Choice : <b>Your Preference?</b>	I think so. / I don't think so. →If you choose 'I think so', underline it / them!

白紙の記述から、生活体験に基づいた記述へ

mini Writing "What do you want to try hard?"

I try to ride - 輪車!

\_\_\_\_\_

\_\_\_\_\_

\_\_\_\_\_

Self-Evaluation

Your Ideas / Content : <b>Interesting?</b>	I think so. / I don't think so.
Your Feelings / Thought : <b>Are There?</b>	I think so. / I don't think so.
Word Choice : <b>Your Preference?</b>	I think so. / I don't think so. →If you choose 'I think so', underline it / them!

生徒 S (資料 7 参照) と生徒 K は第二週では白紙と一行のみで writing を提出していた。しかし、第四週では生徒 S は一行、生徒 K は三行書いて提出した。第二週では、テーマが“Now, you're a player of wheelchair tennis. What do you think about the rules?”であり、writing を書く際には想像するしかない。一方第四週では“What do you want to try hard?”というように、実際の生活体験に基づいて書くことができる。テーマを設定する際には生徒の日常生活とリンクできるものにした方が、writing に対する意欲を高められると考えられる。

“Self-Evaluation”に着目すると、第二週と第四週で“Your Ideas / Content : Interesting?”、“Your Feelings / Thought : Are there?”、“Word Choice : Your Preference?”のそれぞれに生徒の変化が見られた。

“Your Ideas / Content : Interesting?”が“I don't think so.”から“I think so.”に変わった生徒 M は、第二週では客観的に車椅子テニスを見ての意見を書いていた。しかし、第四週では自分のことについて積極的に書いていた。客観的に説明するのではなく、自分が興味のあることについて書くことで、自分のアイデアに自信が持つことができたと考えられる。

生徒 T は“Your Ideas / Content : Interesting?”と“Your Feelings / Thought : Are there?”において“I don't think so.”から“I think so.”に変わった。生徒 T も、第二週では客観的に車椅子テニスを見ての意見を、第四週では自分のことについて書いていた。客観的に書くよりも自分のことを書く方が、視覚的にも自分の考えや感情を書いているということが分かりやすいのだろう。

生徒 H も“Your Ideas / Content : Interesting?”と“Your Feelings / Thought : Are there?”において“I don't think so.”から“I think so.”に変わった。この生徒には第二週の writing の中で、この生徒の個性が出ていて“Interesting”な部分と、生徒自身の意見が書かれている部分とを、朱書きで示した。第二週と第四週とで生徒 H の文体に変化は見られないが、“Self-Evaluation”が変化していることから、客観的に自分の writing を見るできるようになったと考えられる。

これらの抽出生徒の変化から、writing のテーマ設定はとても重要だということが分かる。習得した知識を活用させつつ、生徒自身の生活体験とリンクできるようなテーマを設定しなければならない。また、朱書きで指導することで個別に対応できるので、活用することができる。

#### ②課題と改善の手だて

第二週では“Self-Evaluation”の“Your Ideas / Content : Interesting?”に“I think so.”と答えていた生

徒が第四週では“I don't think so.”と答えていることがしばしばあった。第二週では writing 前にペアで話し合う時間を設けたが、第四週では writing 後に設けた。先に周りとの意見交換することで、様々なアイデアを知ることができ、比較しやすくなり、自分のアイデアに自信が持てるのではないかと考えた。writing の後に意見交換だと、アイデア自体の比較が難しいのだと考えられる。writing を行う際、writing の前に周りとの意見交換ができる時間を確保する必要がある。

また、“Word Choice : Your Preference?”が“I don't think so.”から変わらない生徒もいた。実習前から居た、自分らしさを英語で表現するということが分からないという生徒に、「自分らしさ」の表現について伝えることができなかった。英語で「自分らしさ」を表現するというのを、すべての生徒が理解できるように伝えるにはどのようにしたらよいかを課題である。生徒自身に自分は日本語では「自分らしさ」をどのように表現しているのかを考えさせたり、何人かの文章を用いて全体で共有してみたり等、比較対照させながら考えさせなければならない。

評価に関しては、振り返りとしての“Self-Evaluation”も大切であると感じた。自分の writing を自分で評価することで、自分の writing を客観的な視点から見ることができる。それによって、次の学習活動に生かすことができる。今回、実際にできている生徒もいたが、上手く“Self-Evaluation”を生かすことができなかったために、できていない生徒もいた。次回は生徒目線から、使いやすい“Self-Evaluation”を開発し、生徒の学習に役立てていく。

加えて、朱書きで客観的な視点を示すことは大切であると感じた。朱書きで自分の考えが書いてある場所を示すことで、生徒の中に客観的な視点が生まれる。朱書きを経て、生徒の writing がどのように変化したかを見るところまでできるとより効果的な朱書きの方法を見つけられたのではないかな。

## (2) 教師力向上実習 II

### ① 実践の成果

教師力向上実習 II において授業実践を行った単元の前単元 (Lesson 4) 末で書かれた生徒の writing と、授業実践を行った単元 (Lesson 5) 末で書かれた生徒の writing を比較した。また、授業実践を行った単元で書かれた生徒の writing では、“self-evaluation”と“peer-evaluation”を行った。

writing が書かれた状況としては、Lesson 4 のものは課題として出されていた。反対に、Lesson 5 のものは、授業内に 30 分をとって生徒に書かせた。また、テーマについては、Lesson 4 の方は単元に沿ったものである「好きなイノベーター (スポーツ選手除く) に

ついてエッセイを書く」というもので、Lesson 5 については、単元の内容に沿いつつ、自分の生活体験と絡めて考えることができる「今までの経験を振り返り、自分がどんなタイプの人を好きになるのか、理由・要因について考えてみる」というものである。

資料 8 : 考えの形成・論述の具体化—writing における変容—  
(Lesson 4 (上) と Lesson 5 (下) ・生徒 G)

● You have to use this grammar: 「S + V (+O) + 分詞 or with + O + C」

Write an essay on an innovator you like, except for sport athletes. 70 words

**Theme**  
I think Oda Nobunaya is great innovator.

**Support**  
He was born 1534 in Owari. When he was child, he was called "Utuke" by everyone. Utuke means fool. So, was he fool? No, he acted fool to take the opponent by surprise. He became a popular general of samurai in no time and then he set the target of Tenka toujitu. In 1582, he was died. We call it "Honnouzinoherrn".

**Conclusion**  
I respect his lifestyle.

↓

入手した情報の説明・再現から、  
自分の経験の記述・再構成へ

● You have to use this grammar: 「同格の that 節」 or 「疑問詞 + do you think (+S) + V?」

What kind of people do you like?  
Do you have any experiences that you liked a person?  
Why do you think you liked the people?  
Think about the reason.

**Title**: Funny person is best!

① I like funny person who speak or do interesting things even if her face is not very cute.

② I like smiling and making people smile. I always live to tell a joke. I am attracted the girl if a girl appers in such living. The reason is that I like funny person.

③ I think all of people like enjoyable things. Therefore, people like funny person except me. I don't know that they like the person even if his or her face is not very cute. (85 words)

生徒 G の writing (資料 8 参照) を比較してみると、Lesson 4 の方は、課題としてじっくり書く時間があつたはずだが 70 語であり、Lesson 5 の方の 85 語と比べて語数が少ない。この傾向はほかの生徒にも表れている。生徒 R のものは、Lesson 4 の方は 40 語だが、Lesson 5 の方は 86 語書くことができている。生徒 D

についても、Lesson 4 の方は 60 語だが、Lesson 5 の方は 64 語書くことができている。これらのことから、短い時間でも自分の生活体験と結び付けて考えることができるテーマの方が、生徒の writing への意欲を高められると考えられる。

また、生徒 O の writing を見ると、Lesson 4 では、調べないと分からないであろう表現等も使っていて、作品のようになっている。一方 Lesson 5 では、誰でも読めるよう、辞書を引かなければ読み進められないような難しい表現等は使っておらず、読みやすいものになっている。実際の“self-evaluation”では、“Ideas & Content”と“Individuality”に“A”が付けられており、辞書等を使わずに自分の言葉で自分の意見・考えを述べるのができたからだと考えられる。また、“peer-evaluation”においても“A”がついていることから、伝えたいことが伝わっているということも分かる。このことから、読み手を意識させる“self-evaluation”と“peer-evaluation”は、生徒の writing に影響してくると考えられる。自分の意見・考えを相手に伝えるためにはどのように表現すべきかを生徒に考えさせることができるのではないかと考えた。また、生徒 W の Lesson 5 の writing を見てみると、自分の意見・考えを表現することができるにも関わらず、“self-evaluation”では“B”が付けられている。しかし、“peer-evaluation”において“A”を付けられている。“self-evaluation”と“peer-evaluation”は、他者から自分の writing を評価基準に基づいて正当に評価されることで、自分の writing に自信をもてない生徒に自信をもたせることにもつながるのではないかと考えた。

ミニプレゼンテーションについては、プレゼンテーションを行う際には、準備等が必要となってくるが、このミニプレゼンテーションでは、教師が型を提示し、それに沿って生徒が単語や句、節を当てはめ、自分の考えを表現するというもので、特別な準備等は必要としない。型を提示し、教師の例を紹介した後、生徒には、ペアで発表内容のアイデアを共有する時間を与え、どのようなことを発表したらよいかを考える機会をつくった。そして、実際にペア（アイデアを共有した相手とは異なる相手）で発表しあった際には、型をそのまま使うのではなく、自分の考えをより正確に伝えるために、表現を変更したり、型にプラスして自ら作った文章も発表したりしている生徒の姿も見られた。実際に生徒が積極的にミニプレゼンテーションに取り組む姿を見ることができたのは、大きな成果である。今回の単元であれば、毎回の授業で生徒が自分の考えをクラスメイトと共有できる活動を設定することで、単元末には、実際に準備したプレゼンテーションを行うことにつなげることができるのではないかと感じた。

## ②課題と改善の手だて

生徒の writing を見ていると、タイトルの付け方が気になった。生徒 A の writing では、タイトルが書かれていない。タイトルが書かれていない生徒の writing はこのほかにもいくつかあった。また、生徒 N の writing では、タイトルと writing の内容が一致していないうえに、文章になってしまっている。このような傾向が見られる生徒はほかにもいた。生徒への、タイトルの付け方の指導が不十分であったためである。書籍等の本のタイトルを例に挙げる等して、英語のタイトルがどのように付けられているのか、生徒に考えさせ、理解させたうえでタイトルを付けさせるべきであった。

ミニプレゼンテーションの場面では、はじめから教師が型を提示したが、プレゼンテーションの構成について、本文を基に生徒に考えさせ、共有することができれば生徒の学びがより深まったのではないかと感じた。毎回の授業で行うことは、基礎的・基本的な知識・技能の習得の時間の確保という面で、難しいと思うので、単元末でプレゼンテーションを行わせる際には、生徒とプレゼンテーションの構成を考える時間を取れると、英語でのプレゼンテーションについて生徒がより意欲的に取り組めるのではないかと考えた。用意されたものをただ使うだけではなく、自分たちで教科書（英語表現にもプレゼンテーションの構成が載っているので、それも使えるとより良いのではないかと考えた）の内容を用いて、根拠に基づいた構成を考えることで、学びが深まっていくのではないだろうか。

## VI 教師力向上実習 I・II を通した今後の展望

### 1. コミュニケーション能力育成のために

今回の授業実践では、活用の場面の設定に重点を置いていたので、活動では、生徒同士の意見交換で終わってしまった。自分の意見や考えを持ち、それを英語で表現することができなければ、コミュニケーションにつながらないので、大切なことである。しかし、コミュニケーション能力を高めるためには、相手の発表から、情報や考え等を的確に理解したり、適切に伝えたりする必要がある。今回の授業実践では、活動に対して生徒が意欲的に取り組む姿が見られたので、相手の意見を踏まえて自分の考えや疑問を持つというところまで行うことで、生徒のコミュニケーション能力をより高めることができたのではないかと感じた。生徒の実態に即して、活動の内容を設定しなければならない。

### 2. 生徒の学びを深めるために

授業実践では writing の活動を行い、自己評価をさせ回収したものに朱書きを入れて返却した。しかし、クラス全体で自分の意見や考えが効果的に表現されているものをはじめ、クラスの何人もが同じエラーをしていて気になった部分等を生徒にフィードバックする

こと、書いた writing を基にペアやグループでの言語活動を行うことを十分にはできなかった。

朱書きが入ったものが返却されても、あまり注意して見ない生徒もいたかもしれない。また、生徒が「この表現がどう良かったのか」「どうして間違っているのか」朱書きを見ても分からずに考えることをやめてしまったかもしれない。さらに、言語活動が十分でなかったために、興味のある他者の意見を聞いた際に理解し、それに対する意見や疑問を持つことができなかったということもあるかもしれない。

生徒の学びを深めるために、生徒の学びの場の意味を明確化し確保する必要がある。writing を書くことだけに重点を置きすぎないようにし、writing を通しての言語活動、そしてフィードバックについても考慮して授業を考えなければならない点は課題である。

### 3. 英語科教師としての授業力

本研究では書くことを中心に、生徒の活用力を育むための授業づくりについて実践し検討してきた。しかし、話すこと・書くことのみを育てればよいというものではもちろんない。読むこと・聞くことで習得した知識を基盤に活用を行っていくこと、英語の4技能をバランスよく育てる授業を考えていかなければならない。四月より現場に出た際には、生徒が高等学校での学びを社会に出てから生かすことができるよう、どのような活動を設定して、どの能力を育むのかを明確にした授業づくりを行っていききたい。生徒に、高校での学びが社会に出てから役に立ったと実感させられるよう、日々授業力を高めていく。

## Ⅶ おわりに

昨年度9月よりお世話になったサポーター校の生徒から、12月の学校サポーター最終日に「先生になる前にまた会いに来てね。4月から高校の先生になるんだよね、この高校に来てほしいな。」という言葉をもたらした。生徒と関わる中で信頼関係を築くことができ、生徒から温かい言葉をもたらえたことによって、教師という道を選んで良かったと改めて実感できた。4月からの新たな出会いに胸を高鳴らせ、教師としての第一歩を踏み出していききたい。

### 【注記】

1. 平成23年8月29日にとりまとめられた、コミュニケーション教育推進会議（文部科学副大臣主催）の「子どもたちのコミュニケーション能力を育むために（審議経過報告）」においては、コミュニケーション能力を「いろいろな価値観や背景をもつ人々による集団において、相互関係を深め、共感しながら、人間関係やチームワークを形成し、正解のない課題や経験したことのない問題について、対話をして情報を共有し、自ら深く考え、相互に考えを伝え、深め合いつつ合意形成・課題解決する能力」としている。
2. 「第二期教育振興基本計画」では成果指標として「学習指導要領に基づき達成される英語力の目標（中学校卒業段階：英検3級程度以上、高等学校卒業段階：英検準2級程度～2

級程度以上）を達成した中高校生の割合50%」を掲げている。

3. 2015年4月30日に第2学年全体（198名）に向けて実施。コミュニケーションとwritingに関する4項目の質問（二択回答）に回答し、理由も記述してもらった。
4. 畑野喜信「自由英作文の生徒評価—その結果と考察」『中国地区英語教育学会研究紀要』No.34（2004）
5. 読み手を意識させるものであり、相互にwritingを改善させるためのピア・フィードバックではない。
6. 教師力向上実習Ⅱで実施したwritingの評価において、実際に使用した6カテゴリーを、writing評価の3つの分類（小室、2006）に則して水野が分類したものである。

### 【主な参考文献】

1. 文部科学省関連  
「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について（答申）」（2008年）、「小学校学習指導要領解説 外国語活動編」（同年）、「中学校学習指導要領解説 外国語編」（同年）、「高等学校学習指導要領解説 外国語編・英語編」（2010年）、「高等学校学習指導要領解説 総則編」（同年）、「言語活動の充実に関する指導事例集～思考力、判断力、表現力等の育成に向けて～【高等学校版】」（2012年）、「各中・高等学校の外国語教育における『CAN-DO リスト』の形での学習到達目標設定のための手引き」（2013年、文部科学省初等中等教育局）、「教育振興基本計画」（2013年6月、閣議決定）、「今後の英語教育の改善・充実方策について 報告～グローバル化に対応した英語教育改革の五つの提言～」（2014年9月、英語教育の在り方に関する有識者会議）、「新しい時代にふさわしい高大接続の実現に向けた高等学校教育、大学教育、大学入学者選抜の一体的改革について（答申）（中教審第177号）」（2014年12月、中央教育審議会）、「平成26年度「英語教育実施状況調査」の結果について」（2015年）、「これからの時代に求められる資質・能力と、それを培う教育、教師の在り方について『第七次提言』」（2015年5月、教育再生実行会議）、「『大学入学希望者学力評価テスト（仮称）』の主な論点整理（検討・たたき台）」（2015年6月、高大接続システム改革会議（第3回）配布資料3-4）等。
2. 理論・実践関連文献（英語科教育、授業研究論その他）  
金谷憲、谷口幸夫『英語教師の四十八手<第6巻> ライティングの指導』研究社（1994年）、木村友保『英作文指導』から『ライティング指導』へ』八田重雄喜寿記念論文集刊行会（1994年）、小室俊明編『英語教育研究 リサーチ・デザイン・シリーズ④ 英語ライティング論—書く能力と指導を科学する』河原社（2001年）、佐藤洋一編『国語科「習得・活用型学力」の開発と授業モデル 4 伝記・ノンフィクション編』明治図書（2011年）、横山雅彦『高校生のための論理思考トレーニング』筑摩書房（2006年）等。

### 【付記】

最後になりますが、連携協力校の多くの先生方よりご多用の中、温かいご指導やご助言、励ましの言葉をいただきました。教職大学院の2年間で様々な実習を通して、未就学児から高校生までの子どもと触れ合い、この貴重な経験から多くのことを学ぶことができ、自分自身が大きく成長できたのではないかと思います。また、学校サポーター活動、教師力向上実習Ⅰ・Ⅱ、修了報告書等で継続的に熱心なご指導をしてくださった佐藤洋一先生をはじめとした教職大学院の先生方、今回この場でお名前を挙げることはできませんが、ご指導・ご助言をくださった全ての先生方に感謝申し上げます。本当にありがとうございます。